島尾敏雄　硝子障子のシルエット

葉篇小説集

島尾敏雄

硝子障子のシルエット

葉篇小説集

創樹社

株式会社 創樹社

硝子障子のシルエット　葉篇小説集

一九七二年二月二五日第一刷

定価八〇〇円

著者＝島尾敏雄

装幀・装画＝司　修

発行者＝竹内　達

発行所＝株式会社　創樹社

東京都文京区本郷二―一五―二一　〒一一三

電話東京八一五―三三三一（代表）　振替東京一五四五八〇

印刷＝清和印刷（本文）

印刷＝高橋印刷（装本）

製本＝今泉誠文堂

©島尾敏雄　1972　Toshio Shimao

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

島尾敏雄

硝子障子のシルエット

創樹社

装幀

司

修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目
次

I

街なかは荒野！
影 13
夢にて 19
体験 25

II

三つの記憶 33
松田君の場合 43
笛の音 48
草珊瑚 56

Ⅲ

硝子障子のシルエット　63
鶏飼い　73
終電車　78
鶏の死　86
妻の職業　94
きみよちゃんの事　102
金魚　110
子供　118
突つき順　126
おちび　133
ニャンコ　141

居坐り猫　148
マヤ　155
玉の死　162
ある猫の死のあとさき　170
つゆのはれ間　177
二軒の古本屋　184
運動会　191
拾った猫　199
地蔵のぬくみ　203
あとがき　209
跋――埴谷雄高　211

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

街なかは荒野！

街にこんなに犬が殖えて来てああ厭なことだ。どうしてこんなにたくさんの犬がうろうろ歩き回っていることなのか。そのうろつきようのみすぼらしいことったら。首をたれてちょこちょこ小走りに街筋を移動する。真っ直ぐゆったりと歩きはしない。ちょこちょこ歩いては立ち止って物のにおいを嗅ぐ。そしてまた反対の方にちょこちょこ走って行っては、物ほし気に立ち止って物を嗅ぐ。唐突に横あいから出て来たりしてはすり抜けて行くこともある。これらの夥しい犬はどこに棲息していることなのか。もしそれらが人に飼われているの

なら飼主はその邸の中から外に出してひとり歩きをさせるようなことをしなければよいのに。飼主は犬がどんなに危険な獣であるかを少しも知ってはいない。まるで無知な悪意のない軽信さで自分の飼っている犬を信じ込んでいる。しかしもしちょっとでも飼主たちに犬たちの正体を気づかせることが出来たなら…。

私はどうしたって街なかを歩かなければならないのだし、そうすると街角には必ず犬がいる。私を見ているその何物かへの忠実そうな眼付を見てみなさい。その生真面目そうな涙のたまった眼をみたらいい。私はむかむかして舌打ちをする。ちえっ、何だって犬を街なかに出して置くんだ。私が恐い顔をして近づくと、犬は遠まきに一応はよける。しかしすれ違うとすぐ私の背中に眼がないことをいいことにして、犬は渦にすいよせられるごみ屑のように、すうっと私のうしろに近よって、においを嗅ごうとする。何ということだ。私ははらわたが煮えくり返るようだ。私はいやな予感できっとうしろをふり向き、馬鹿気切

った黙劇のやりとりをしなければならないではないか。茶碗に浮いた茶屑さながらに、吹けば遠のき、さて歩き出そうとするとついて来る。畜生！　犬は知っている！　そのみすぼらしい飼いならされた彼の方法でこちらの顔色を窺い、私が全く無害な人間であることを感じ取っているのだ。私は仕方なく歩き出す。犬はちょこちょこ知らぬ振りをして私の歩行の前後にまとわりつく。もう全く私を無視した態度で私をなやまし出すのだ。私だって色々な物思いに暮れて浮かぬ気持で道を歩いている時もある。その時には私にしても犬のそんな仕打ちには我慢が出来なくなるのだ。しかし私はその犬から正面切って喧嘩を売られたわけでもないことに気がつく。私は絶望する。犬は私を離れ、そしてその仲間に私のことをひどく悪し様に吹聴するのに違いないのだ。

日々の中のある日、自分の犬を信じ切った顔付の飼主が立っていた。私は彼と同じ人間であることを疑った程だ。彼は何という生きものだと。お前の持っている手綱を放しちゃいけない。私は心の中で叫んだ。しかし飼主はにこにこ

と手綱なんか放してしまう。私は言いようのない寂寥を感じた。その上その飼主は私より先に叫んだ。「じっとして下さい。じっとして下さい。」私は取引に負けちゃったのだ。だから私はその犬を蹴殺すことをやめて、じっとした。そして噛まれてしまった。その忠実そうな生真面目な涙をたたえた眼で私をみながら、犬は私の肉を噛み取ったのだ。その日から街は私にとって荒野と化し、私は原始人の如くひとりぼっちになった。

影

「渇き」が歩いていたと言ってもいい。ぼくはその渇きのとりこになり、方向も方法も見究めがつかない。つまり野性の状態がそこにあった。渇きの重さだけが、ぼくの身体の中を跳梁し、感覚としては、楽しいものであった。というよりも、渇きの感覚だけで、歩いていたのであろう。

それが善いことなのか悪いことなのかについて悩む機能が欠けていた。ただ、しめりを求める、うめき、それはかすれて、欲望の犬の呼吸の気息に似て、ラッセル音響を生じているようであった。そのラッセル音響が次第に強く高く、

グラフの曲線を上りつめると、墜落することは、ほぼ、ぼくにとって分っている。而も、その渇きに命ぜられるままに、ぼくは夢中で歩いていた。

恐らくは、恥さらしな傾斜であることだろう。然し、それを止める何の力もないことが、虚無のような情緒をいろどっていた。

道筋はいつもの通り。

そこは眼をつぶってさえ歩けるかも分らない。

午後の日のぬくもりがうむれていた。

不思議に外界の音響が消されて感じられた。何も動かず、邸宅の建物と庭の植込みと、そして長い土塀が、そこにあった。

その土塀の端を曲ると、見なれた景色が、いつもの通り、ぴたりと私の頭脳にはりつき、そして、「そこ」はもう、手の届くところに見えている。下水の流れが、その塀の角でだけ、不思議に澄んだ音を立てているのであった。いつも、その音に、渇きのとりこになっていて、やがてもうじきに、おろかな後悔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.